

# 第五回 文芸思潮新人賞発表

## 文芸思潮新人賞

第五回文芸思潮新人賞に御応募くださりまして、まことにありがとうございました。今回は前回より微増の三九篇の応募がありましたが、やや低調で、残念ながら優秀賞以上の該当作はありませんでした。発想の鋭さ、新しい視点や着想、文体を備えた作品がいくつか見られましたが、新人にふさわしい気概を持った作品は見られませんでした。

九月末に予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な選考審査の結果、以下の通り決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。奨励賞作品二篇だけを掲載させていただきます。

授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが、考慮中です。佳作以下の賞状・賞品は後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、よろしく御了承ください。

なお文芸思潮新人賞は明年も枚数、締切、審査料などほぼ同じ要領にて募集させていただきます。挑戦意欲を持った気鋭の新人作品を大いに期待しております。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ち申し上げます。

## 最優秀賞

### 該当作

なし



## 優秀賞

### 該当作

なし



## 奨励賞

### 「怒」

宇部道路

(東京都豊島区)

### 「青」

小村詩穂子

(大阪府堺市)

## 佳作

### 「他人留学」

桜串あや

### 「30で死ぬということ」

岡本 択

### 「痛みを辿って」

阿彦美咲

### 「めざめ」

水谷忠央

### 「彼女のシネマ」

仙波寛人

## 入選

### 「狐の嫁入り」

角谷美和

### 「画布と視線」

真木ダイク

### 「やわらかにお眠りください」

乾あまぐつ

### 「宇宙交尾」

麻木春希

### 「素数ゼミ」

あずき

### 「卒業式」

木村恭一郎

# 選評

## 少し低調

### 大高雅博



昨年は、当選作が出たが、その反動なのか、今回は、少し、低調であった。

奨励賞の宇部さんの「怒」であるが、文体に力はあったと思う。

自分の舌打ちが肩と肩がぶつかった相手に伝わり、その男は仕事のライバルであった女性を刺す。そのことを、自分が事件の引き金になったかもしれない事を隠し、その事件を取材することになる。物語としては、面白い構成である。ただ、最後が、自分が胎児となり、子宮から、出てくるイメージなのだろうか、ただ、「怒」と上手く結びつかないような気がするのだが、どうだろうか？

奨励賞の小村詩穂子さんの「青」だが、中々、面白い設定のようだし、それなりの雰囲気があるのだけれども、たとえば、「アンチナリズム」という言葉が出てきて、意

法もあるが、熟慮が必要だと思う。

佳作の岡本沢さんの「30で死ぬということ」は、愚兄の話なのだけど、実は、結構こういう題材は多い。その作品群と違うのは、最後の方で、生身と思われる兄が、出てくるところで、そこは良かった。ただ、全体に表現が甘い。

間違った使い方があり、「はんぶん」に割られた中辛のカレー粉（はんぶん）に割られたとすればカレー粉「カレー」を作る前の気分転換に死んだみたいな唐突さ」と書いてあるのに、後で、「冷蔵庫の中には」「おでんの残りがあった。」とあり、矛盾しないだろうか、何度も読み返してほしい。細部が重要。

佳作の阿彦美咲さんの「痛みを辿る」は、昔自分が書いた文章を読み返すことで、感動や痛みについて考えるといったような、独特で、不思議な感じがする作品で、良いと思った。ただ、この作品は、もっと、感覚的に書いた方がいいかもしれない。少し繋ぎが悪いと思ったのは、昔自分が書いた文章に入る前の行で、「私は氣に入りの曲を再生し、目を閉じた」で、その後文章が出てくるので、目を閉じては読めないと思った。続けて「すると、その文章が浮かび上がってくる」というようなことを付け加えれば、良かったかもしれない。

重箱の隅をつつくような事柄ばかり書いているような気がするが、細部が大事。何度も読み返してください。

外と、全体と関わる言葉のようだが、説明がない。この言葉だけで、理解できる人間がどれだけいるだろうか、これは説明が必要だと思う。それにこの小説は「青」という姓氏との話だと思うが、最後は、扉の中から生まれてから一度も会ったことのない兄が出てくる。そうすると、私の中に青がいると感じる。それらを含む最終の部分は、正直、理解が難しい。感覚的には、わかるのだけれど、もっと、明確さが必要ではないか、そうすれば、衝撃が増すと思う。さて、この小説には、「マップリ」という言葉が出てくる。別の小説でも似たような言葉が出てくるのだけれど、似たようなというのは、インターネットが普及してその周辺で生み出されて広まった言葉という意味だが、おそらく、作者と同世代なら、誰でも知っている言葉なのだろう。ちなみに「マップリ」は、ケイタイで調べると、すぐにその意味が出てくるのも不思議な感じだが、「マツチングアプリ」の略語であるらしい。言葉は、どんどん変わっていくものだけれど、小説を書くときには、繊細さが必要だと思う。これは流行語ではないだろうか、つまり、流行であれば、すぐに廃れるかもしれない。半年後や一年後には、誰もわからないか、使わなくなっているかもしれない。その時、誰かが、この小説を読むと、意味がわからないか、酷く時代遅れなものに感じるかもしれない。つまり「ダサイ」小説になっているわけだ。そのことを分かっていて使う方

## 波の底部に遭遇——不振

### 五十嵐 勉



第五回の文芸思潮新人賞は低調で、落胆した。応募してくる作品群には、当然波があり、第一回のように最優秀賞が一度に三篇出るほどいい作品が集まっている場合もあり、逆に今回の

ように優秀賞にも届かない線で留まっている場合もある。まだ応募数が二桁台前半にあるような状況では、その当たりはずれが大きいのはやむを得ず、今回は波の底部に遭遇してしまつたと諦めるよりしかたがないのかもしれない。特に先回は文章がいい作品が多かったので、今回のように読ませる新味の文章が少なかったことで、低調が目立つたきらいはある。

そうは言っても、それなりに新人の鋭い視点や、新感覚の文章は散見した。奨励賞の二作にはそれがあり、今後が期待できる可能性は感じた。

宇部道路氏の「怒」は、社会の圧力下で鬱積した不満がちよつとした言葉や舌打ちで一氣に爆発する現実をうまく

# 選評

取り出して、凶暴化した「怒り」の形を作品にしている。確かにこういう個人と社会の乖離現象は見えない部分で大きくなっており、胸の底に溜まった怒りはごく些細なことで爆発することが多くなっている。秋葉原の事件も、思うようにならない社会から自身が拒否されている乖離感が、負のエネルギーとして爆裂した構造を有している。ただ、昔とは違った現代的な形を取っているそこにこそ、文学は社会の矛盾の領域と、個人の内面の領域の両面を汲み取っていかねばならないだろう。現代は富める者と貧しい者との格差が想像以上に広がっている。一方はアパートの一室で孤独死するような窮状にあり、一方は一流ホテルで豪華な食事を楽しむような生活をしている。そして規則や法律や社会組織の硬い縛りによって、貧しい者はいつそう生き方を狭められている。一般の水準の生活との隔たりが、自己の疎外感として鬱屈し、思うようにならないどころか反対になっていくことが、一般を憎み、怒りとしてそれを傷つけ破壊する衝動となっていく。この小説に足りないものは、なぜその構造が造られ、どうしてその殻を打ち破ることができないのか、その社会構造と怒りの感情構造まで踏み込み、その根と行方まで掘り下げ切っていないことである。些細なことで発火するその微妙さに主に目を向けてしまつて、その奥の重要な構造を掘削していない。着想のおもしろさに眼を奪われてしまつていいる。これをしつ

かり摘出して、普遍化できたら、意外に大きな共感を呼ぶものになるだろう。文学としてはそこまでやってほしい。同じく奨励賞の小村志穂子氏の「青」は、文章の一つのスタイルがあり、現代的な文章の新しさとして流れている。肉体の生理的な感受性が、現実の一つ一つの具体的な事物に奇妙に溶け合い、物が心理化され、心理が物化される。その出し入れや溶け合いは新しい文章表現としてうねり流れている。その長所は創作に到達しているが、逆にそれによって客体的世界が形を取りにくく、一つの現実としての境界を曖昧にしている。「青」というのは、人物でもあり、世界感覚でもあり、空気でもある。その溶け合いが新しい感覚を醸していると同時に、逆に現実造形を遠ざけている。「現実はそのようなものであればいい。客体的でなくともよい」というのも一つの立場であり、表現基盤になりうるが、現実とは逆にそこに留まる者に対して報復するかのように容赦なく襲いかかってくるだろう。それをどうするか、覚悟と準備がいるはずである。この作品に対して、他の選考委員は「何が書いてあるのか、よくわからない」と言った。そのわかりにくさは、現実までいっさいを感覚に飲み込み現実を溶かして受容する強烈な感受の消化力にあるのだが、溶かしてしまつた現実とは、実はもっと強固な屹立を残しているはずで、その残存の問題をどう処理していくかが大きな課題となるだろう。

あともう一つ。出だしの「親孝行という言葉自体がおかしくね？」という部分は、表現として新しくても、内容としては軽佻になり、足元を見られる。親の無視を気取つても、結局自分も親になるかもしれない、そのときはこの言葉を撤回する羽目になるからである。もっと別なことでインパクトのある出だしにできるはずである。今回の新人への落胆を一挙に吹き飛ばすような新鮮で挑戦的な作品を次回は大いに期待している。

## 今回は不作

### 小浜清志



今回は全体的に不作であつたような気がするが、私がつとも興味を持った作品は「30で死ぬということ」であつた。三十を迎えた日の朝に、タマネギの隣で一人で首を吊つてい

た兄について書こうと思った。外線電話が鳴つて上司が僕を呼んだ時、僕は直感的に兄がもうこの世にいないことを悟っていた。

兄はごく控えめに言つてプライドのかたまりのような男

だつた。垢ぬけないことを指摘された次の日には美容院で親の金を盗んでまで流行の髪形にしたり、半ズボンからのぞく足の毛深さを指摘された翌日にはすべての半ズボンをゴミ袋に入れ、かわりに同じ数の長ズボンを買ひそろえた。数学の授業で教師にとんちんかんな回答をした次の定期試験で満点をとり汚名をすすいだし、ユーモアの久如が原因で交際相手に振られてからしばらくはたとえ葬儀のときでも冗談しか言わなかった。なにか事が起こるたび、兄はこれまでの衣服を脱ぎすてて別人へと変わつていったのだ。兄は昔から小説を読むのが好きで、古本屋で虫に食われたような本を安く買い込んで大切そうに棚に並べていた。しかし、一二月は放つておくので、僕はその間に勝手に読みあさつていた。そして、兄がその本を読み終えたころ合意を見てから感想を聞いたのだった。しかし僕の期待はすべて裏切られ、お前にはまだわからないと逃げられてしまふ。

僕が九歳のとき両親が自動車事故で死んだ。祖母のところに兄と二人で預けられることになったが、僕は優等生から問題児と華麗なる転身をした。三日に一度のスパンで祖母は学校に呼び出されるのだが、認知症のはいった祖母は「はあ」と「へえ」と「さようですか」を繰り返すばかりで話がまとまることはなかった。問題児はますます手が付けられなくなり、盗んだチョウウクで目に入る全ての物に落

## 今回は低迷した感

### 八寛正大

書きをする。翌日目撃者がいて僕は職員室で問い詰められるが一言も謝らない。その時中学生の学生服を着た兄が現れ保護者としての振る舞いをして僕は解放される。落書きを兄と消しながら僕は元の自分に帰ろうと思う。というところで話は終わるが、兄に限らず一人の人間を文章で捉えるのは不可能なことではないかと感じてしまった。前半の兄の描写は自分のことを書くこうとしているのかなとも思ったが、そうではなくてやはり兄だった。どこに軸足を置こうとしていたかが良く分からなかったか、挑戦しようとしたことは素晴らしいことだと思った。

宇部道路「怒」、誰の中にもある「怒」をどう描写しようかと考えた結果テレビ局を狙った無差別殺人事件が生まれたのであろう。その犯人と事件の前にすれ違いざま肩をぶつけ、舌打ちをした。それが犯人の怒を刺激したのではないか。しかし、永井という犯人はテレビの番組が視聴者にむけ怒をむき出しにしていると怒る。同じ部署の今川も被害にあい意識不明の重体である。その今川を守ろうとして鈴木という銀行マンが死んだ。その母親と面会した時母親が加害者もテレビ局の皆さんも許せません、大事な一人息子を奪ったのだから。怒は伝播し怒は深まっていく。しかし、輪郭すら見えてこない怒をうまくとらえきれないまま幕引きになってしまった。



第五回目になるこの賞、今回は多少低迷した感があり、これは——と言う作品には出会えなかった気がする。感覚の鋭さや、設定のおもしろさは見られつつも、目を見開かせ、こちらの感性が揺さ

ぶられて読み終える……ほどのものはなかった。思い切った発想と、それを展開する構想、小説舞台を支えるリアリティ、気づかれてこなかったことへの指摘……言うのは簡単だが、作るのは並々ならぬ覚悟と力業が要るだろう……次回をさらに期待したい。

「怒」 怒りというものについては、良く考察はできていると思う。怒りによる無差別殺人、その原因を知ろうとするテレビ局に勤める中堅社員の話だ。

育児休暇の取得を決意したため、主人公は若手女性デレクターに企画を横取りされてしまう。そんな胸中の「怒」を抱えて歩く中、全身黒づくめの男と擦れ違い肩がぶつかる、その瞬間思わず舌打ちをしてしまう。そこは印

象的だ。〈そう、舌打ちを私は確かに打ったのだ。この世界へと、その短い音を響かせた。それは、彼がぶつかったことをトリガーとする銃声にも等しいような、私の「怒」を世界へと解放する作用であつたのだ。……そのときはまだ知らなかったのだ。平常とは異なる怒濤の日常が待っていることを。広がっていった「怒」の波紋が、私の日常に押し寄せてくることを。〉

自分の企画を横取りしようとしていた女性が、その黒づくめの男に刺される。また立ち向かい巻き添えとなり死亡した男性も出る。主人公は、その原因を〈自らが発した「チツ」という舌打ちの音響は、私の怒りが発露した、確かな「怒」であつたように思われる。やはり私が悪いのか。あの時の私が悪いのか〉と悩み繋げていく。被害者の男性の家族と会い、また殺人犯と主人公は対峙しその過去も知ろうとする、その原因をも……。しかし、最後は夢になって、掴み切れてはいない。

神戸の酒鬼薔薇事件や、池田小の児童殺傷事件……秋葉原の無差別殺人、養老施設の無差別殺傷事件さらに……時折、無差別殺人事件は新たに起こっては社会的話題となる。作者は、そこに一つの解釈を犯人の言葉で表そうとする。〈「あんたたちが撒き散らす「怒」が、国民を、俺たちを怒りに満ちた不幸な人間に変えている想像もつかないのか、このアバズレ野郎」〉と。そして主人公は、チツと

いう舌打ちのトリガーに何度も何度も戻って行くが、原因となったことへの自意識過剰と、初めから「怒」と概念化してしまったために、解の存在は臆げに見えつつ、解けていない感がやはり残ってしまう。感情と行為との関係をさらに追究して欲しい。かつて『異邦人』の作家カミュは、主人公が太陽のせいで偶然アラブ人を射殺し、やがて死刑になる話を書いた、それは原因の分からない『不条理』として一世を風靡した……ことがあった。

「青」 出だしの、投げ掛けのような、一見ぶっきらぼうな表現は面白い。〈……暑苦しいコンクリもこの夏もてゆうか去年もその前も、嫌悪で煮込まれ泡になる。……そういう日が何度かあつて、その何度かを貪り生きている。息、息、息、息。もういいって。鬱を孕んだ卵はむくむくと育ちまくって、夜間、成長するっぽい。〉そんな感覚の主人公が、青という男子学生と仲良くなる。

〈二〇二三年の大学に縄文土偶がふたり、しかも一人は喫煙者。青が煙らせる右手を見ながら私も言う。「かわいい」この時からたぶん、私は息を吸う場所を得た。〉そして青との関りや大学の授業の話、アンチナタリズム……などと出ては来るが、青とはそれっきりになってしまふ。ラストに出て来る、お兄ちゃんへの呼びかけ、未生という主人公の名前が何かを暗示しているように思えるが、よくは分からなかった。

## 第6回 文芸思潮新人賞 作品募集

文芸思潮では、新しい世代、新しい時代の小説作品を募集します。清新な感受性、斬新な発想、大胆で挑戦的な構想、画期的な文体や文章による表現など、若い世代でなければできない鋭い小説創作を期待します。社会の変化や生活の激変の底に沈む人間の声の爆発、新しい前衛的な試み、新奇の感性、海外の体験に基づく地球規模の体験など、常識を覆すパワーの小説作品をお待ちしています。

### ●●募集要項

**募集内容**●オリジナルの短編小説作品。純文学に限らず、SF、エンターテインメント、歴史小説、推理小説など小説ジャンルは自由。これまで同人雑誌などに発表した作品の改作も可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

**応募資格**●2025年4月30日時点において39歳以下の者

**応募規定**●2万字以内。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取り、コピーを応募のこと。400字詰原稿用紙はなるべく使用しない。使用する場合はA4を用いること。

別紙に①応募部門を明記（2025第6回文芸思潮新人賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム・どちらも要ふりがな④年齢・生年月日（生年月日のないものは失格とする）・性別⑤住所⑥電話番号⑦職業・略歴

応募者には結果を通知する。

**応募審査料**●2800円（郵便局の郵便為替を無記入で同封のこと）外国からは20USドル。切手も可。郵便為替2000円+切手も可。（外国切手は不可）

**応募先**●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」新人賞係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

### 賞●文芸思潮新人賞

最優秀賞■賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者2名の場合は12万円、3名の場合は10万円）

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状

**選考委員**●作家集団「塊」メンバー

**締切**●2025年4月30日（当日消印有効）

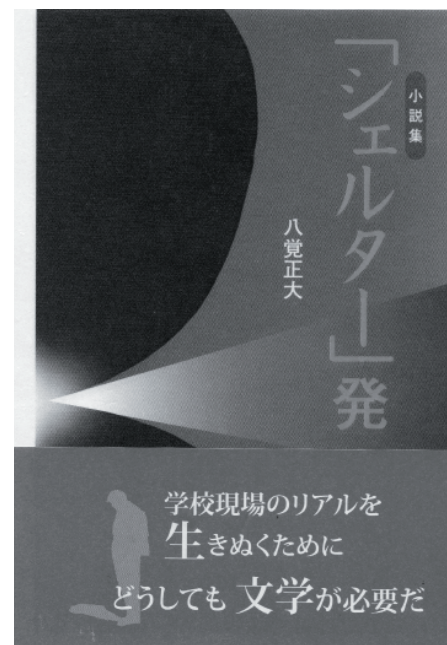
**発表**●予選通過者は2025年9月25日発売の「文芸思潮」97号に発表する。受賞作・優秀作は2025年12月25日発売の「文芸思潮」98号に発表掲載。奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

**主催**●文芸思潮

※主催者から 新しい世代による新しい小説を期待する。一見平和で、安全に蓋をされている現代の便利な生活のなかでも、噴き出している何かがあるはず。全て表面はきれいに覆われている中に、もっと暴かなければならない人間の本質的な問題が潜んでいる。それらを剔出するような新鋭の作品を期待しています。



「30で死ぬということ」 死んだ兄を回想する弟の視点。  
「……兄は自分というものを持たなかった。……すぐに誰とでも仲良くなれるくせに本当の親友は一人もいない男。実のところ、ほんとうの兄の姿を見たことのある人間は僕も含めて誰ひとりいないんじゃないかと思う。だから僕が語ろうとする兄もまた、兄ではないのかもしれない」と。  
一方「人が一人死んだのなら、少なくとも一冊の本が書かれるべきだ」という小説家を目指した兄の言葉が繰り返される。それは誰が何のために書くのか？（この文章の原動力はただ兄という人間が何であつたかを確かめたいという純粹な熱意以外の何ものでない）とある。何か抽象的な思いを書きつつ、話はだんだん具体的にになっていく。兄は「ブライドのカタマリのような男だった」。しかし中身の兄に對し、弟はそれを凌駕する読書をしていくこと。兄の遺品一覽も、何だろう……と読んで読んでいた兄が特に纏まりは感じられなかった。P11からは主人公のことになる。P13、14は交通事故で両親を亡くした（唐突な感がある）自分を兄がかばってくれた？ 話（これは面白かった）なる。前半との整合性云々より、P11からの作品にした方が、小説になった気がする。  
「痛みを辿って」 主人公が以前に書いた自分の思いを読み直し、さらに考察を加えていく話。「痛み」や「感動」……その過去に書いたものを再読し、ある種の自己内対



八堂正大小説集「シェルター発」  
1500円

話、考察を加えた後、前へ向かって生きて行こうとする決意が描かれている。純粹な考察はなるほどと思われるが……エッセイ的な感がある。  
「彼女のシネマ」 女子高校生が主人公。実は中学時代女子バスケットボール部の部長をやっていた時、仲間の自死に遭い、それを自分のせいになされた過去がある。ふと、とある映画館に出会い、そこで映画を観ている内に眠くなり……過去を回想しながらどこか癒されていく。ライトノベル的でストーリーは伝わる。ただいじめの加害者にされたことは色々出て来るが、タイトルとの結びつき、さらに生き方への思いが少し弱い気がした。